chapter.04

仏典の切れはしを読む方法

——「根本説一切有部律薬事」新出サンスクリット写本の研究とデジタルデータ

八尾 史

1. はじめに

1-1. わたしたちがまだ読んだことのない文字

仏典と呼ばれるものは数多く、人口に膾炙しているのはそのほんの一部にすぎない。仏教が流布した広大な地域とそこで用いられた多様な言語、その長い歴史を考えれば、大量の仏典が今日無名のままにあることになんの不思議もない。仏教を専門とする研究者にも内容が知られていない仏典は数多くある。それらは端的に読まれていないのである。

その一方で、広く知られよく研究されている仏典がある。それら○○経や○○論はサンスクリット語その他の原典が校訂出版されている上に、現代語に翻訳されて書店や図書館に並び、関連する無数の雑誌論文や書籍が出版されている。そのような仏典はもう何千回、何万回と読まれていて、研究者や一般読者の目にさらされていない部分は一行も残っていないようにみえる。しかし、校訂本のページに印刷されている文章がその○○経なり○○論のすべてであるのではない。そのページの背後には誰かが手書きで残した写本があり、異なる場所で異なる時に書かれたいくつもの写本を誰かがつきあわせることで、校訂本の文章が作られている。写本は寺院や博物館の収蔵庫で発見されたり、遺跡から発掘されたりするが、その中にいままで知られていたどの写本の該当箇所とも違う文面（「読み」）が見つかることがあり、まれにはそれが文献の伝承史や言語や思想を知る上で重要な意味をもつこともある。そうした発見はいま現

在も続いている。近代仏教学が始まって200年ほどになるが、こうしたわけで、仏典という世界にはいまだ現代の人間がそれについて考えたり議論したりする場にのぼっていない無数の文字があるのである。

筆者が研究している根本説一切有部律（こんぽんせついっさいうぶりつ）という文献は、かつておそらくアジアの各地で数多くの写本に書き写され、のちにそのほとんどが失われた。それらの写本の一つが20世紀の末になって研究者たちの前に忽然（こつぜん）と現れたのだが、そこに蔵せられている文字は、8世紀前後に書かれて以来現代に発見されるまで、もしかすると一度も、誰にも読まれなかったものである。本稿ではこの写本を読む作業がどのようなもので、それによって何がわかってきたのかを述べたいと思う。なお本稿の「2-1. 根本説一切有部律とその現存資料」と「2-3. 解読された写本断片からわかること」は、『仏教学』誌（2019年）に発表した拙稿の内容を専門外のかたにも読んでいただけるように書き改め、いくらか内容を補ったものである。

1-2. 21世紀に8世紀の写本断片を読むということ

現代の人間のさまざまな行動がそうであるように、古い写本を解読するという作業もいまではデジタル技術に支えられている。19世紀から20世紀なかばまでのインド仏教研究者たちは、貴重な写本の実物もしくは白黒写真を机の上に広げて読み、古い時代の書体で書かれた文章を、手元の紙にローマ字や近代のデーヴァナーガリー文字で書きとっていたのだろう。現在の研究者もやはり文字を読んで書きおこしていることにかわりないのだが、その作業はコンピューター上で行われ、かつては困難だったであろうことが今日の技術の助けによってしばしば容易に達成される。筆者は特殊なコンピュータプログラムを利用したり開発したりしているわけではないが、本稿では自身の扱っている資料をもとに、デジタル技術がどのようなかたちで写本研究を可能にしているのかを記述してみたい。ただしインド語で書かれた仏教写本は時代・地域の両面できわめて広範囲にわたり、幾多の研究の蓄積があって、筆者は新参者としてその世界のほんの一画を垣間見たにすぎないから、ここで提示しうる情報はごくささやかで偏ったものである。あくまで一つの事例にすぎないことをお断りしておかねばならない。

2. あらたに発見された根本説一切有部律サンスクリット写本の研究

2-1. 根本説一切有部律とその現存資料

根本説一切有部律（以下、略して根本有部律）というものはかつてインド内外に一大勢力を有していたらしい仏教の一派に属する僧院規則文献（律蔵）で、僧尼の生活を律する規則のほかに説話文学のたぐいを大量に含むことで知られている。この説話というのは、たとえばある規則が制定されるに至った背景の事件を説明する物語（規則は教団になんらかの不祥事が起こるたびに開祖ブッダによって一つ一つ定められていったことになっている）や、ブッダの人生とその教団のなりたちについての物語や、ブッダその他の人々の前世の物語などである。成立年代ははっきりしないが、紀元一千年紀の前半に今日見るような形になったというほどのところでは衆目一致するだろう。インドの古典語であるサンスクリットで書かれ、7 世紀末から 8 世紀初頭にかけて漢文に、9 世紀にチベット語に翻訳された。全体として「律分別」、「律事」、「雑事」、「ウッタラグランタ」と呼ばれる四つの部分からなるが、このすべてが完全な形で現在まで残っているのはチベット語訳だけである。

1990 年代末まで、根本有部律の大部のサンスクリット資料としては、7 ～ 8 世紀のものとされる「律事」の不完全な写本一つが知られるのみであった。1930 年代に現パキスタンのギルギット附近で出土したこのいわゆるギルギット写本は、はじめインドのナリナクシャ・ダットによってデーヴァナーガリー文字のエディションとして出版され、しかしそのエディションに問題が多かったために、後の研究者たちによっていくつかの部分が再訂されてきた。また白黒写真版も出版され、長らく使われてきたが、それに代わる精細なカラー写真版（詳細な書誌情報を含む）が 2014 年にカナダのシェーン・クラークの編集によって上梓され、写本の参照が飛躍的に容易になった。ギルギット写本のほかには中央アジアで「律事」各章、「律分別」、「ウッタラグランタ」などの写本の断片が出土している。このほか根本有部律から抄出された説話を多数含む『ディヴヤ・アヴァダーナ』というサンスクリット説話集（年代不詳）があり、根本有部律のサンスクリット不在箇所を補う貴重な資料である。本稿がかかわ

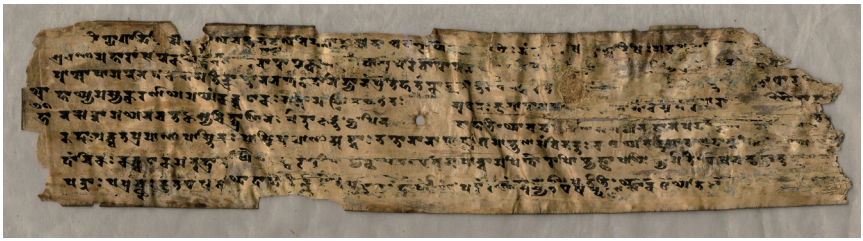
るのは「律事」の第6章「薬事（やくじ）」で、これは薬に関する規則とともにおびただしい説話類を含む長大なテクストである。ギルギット写本では章の半分ほどが散逸している。

西暦2000年頃、ギルギット附近から出土したとみられるサンスクリット写本断片群の中に、根本有部律のいくつかの部分に属する断片が発見された。サンスクリット仏教写本研究の専門家であるクラウス・ヴィレがその大部分をローマ字に書きおこし、根本有部律に同定した。筆者はヴィレの先駆的な仕事の後を受けて2011年以来、これらの写本のうち「薬事」にあたる断片群を研究している。

新出の「薬事」写本はギルギット写本同様、横長の矩形に整えられた樺（かば）の樹皮（この一枚一枚をフォリオ、葉（よう）などと呼ぶ）に書かれ、各葉の表側、左の余白に通し番号がつけられている。字体もギルギット写本に近い。同じ場所で出土した「長阿含（じょうあごん）」の写本を放射性炭素年代測定法で測定した結果が8世紀後半から9世紀で、「薬事」写本の制作時期もおそらくそれから大きくへだたることはないであろう。破損がいちじるしく、一葉として完全なフォリオは残っていない。積み重ねられた状態で長いあいだ上からの圧力を受けたためか、しばしば複数のフォリオがたがいに固く貼りついて束になっている。そしてその束のまま分断されて複数の塊になったり、塊の一部が剥がれ落ちたりしている。

これらの断片群は現在、アメリカとノルウェイの個人蒐集家それにパキスタン政府という三者のもとに分かれて保管されている。中には一葉のフォリオの一部がアメリカへ、別の一部がノルウェイへと泣き別れになっているものもある。いままでに「薬事」に同定された断片は239個にのぼり、これら断片の属していたフォリオは「薬事」全205葉のうちの90葉に及ぶと考えられる（なおこの数字および本稿全体の記述は2019年1月までの研究にもとづいている。その後ノルウェイ個人蔵部分の調査が進み、断片数はかなり増えた。新しく利用可能となった断片の解読は現在進行中である）。

この写本の出土した状況について、詳しいことは知られていない。解読作業の過程でわかってきたのは、発見されるまでの数世紀か十数世紀のあいだ、この写本がかなり混乱した状態に置かれていたらしいということである。現在のように断片化する前のフォリオがどのような位置関係にあったかは、写真から


比較的大きい断片の例（複数葉貼りついている）

零細な断片の例

見てとれる重なり具合や、重なりあったフォリオ同士のあいだでついたインクの染み、また虫食いの穴などをもとにある程度再構成できる。その結果、複数の箇所でフォリオの順序がはなはだしく乱れていたことがわかるのである。またフォリオの中央左寄りに開けられた穴も重要で、これはインドの写本には一般にみられる、フォリオが散逸しないように紐（ひも）を通すためのものだが、この「薬事」写本の穴には傷みがみられない。つまり、紐を通して使った形跡がない（これは前述の「長阿含」写本について報告されていることと同じである）。また、おそらく過失によって穴を開けられないまま放置されたフォリオもある。さらに上述の方法でフォリオの位置関係を再現すると、数枚のフォリオが重ねられて紐穴を開けられ、フォリオ同士のあいだでインクの染みがつき、複数のフォリオを貫通するようにして虫食いの穴ができ、そしてフォリオがたがいに固く貼りつくまでの期間、その位置関係はほとんど変わらなかったことが推測される。したがって、この「薬事」写本は書かれてから出土するまで一度も読まれず、別の写本へと書き写されることもなかったのだろうと考えられるのである。

2-2. 写本断片解読の作業

2-2-1. デジタル画像データの利用

「薬事」新出写本はこれまでにその各部分がスキャンあるいは写真撮影されており、研究者にとって解読作業の直接の対象となるのはこれらの複製である。まずアメリカにある断片群については、2005 年に作成されたスキャンデー

タがある。つぎに現在ノルウェイとパキスタンにある断片群については、1999年以前に撮影されたカラー写真があり、数名の研究者の手元に紙焼きの形で保管されている。またノルウェイの断片についてはその後さまざまな機会に研究者たちがデジタル写真を撮影していたが、2019年2月とそれ以降にスキャンが作成された。これらのデジタルデータおよび写真はいずれも公開されていない。

アメリカ、ノルウェイの断片のスキャンデータはきわめて解像度の高いもので、極端な拡大に耐える。保存状態のよい写本でも画像がよいにこしたことはないが、破損した写本の場合は特に、画像の精度が可能なかぎり高いことがのぞましい。それによって断片の縁にあるなかば欠けた文字が一つでも多く読めるからであり、画像を反転させればインクの裏移りした染みまで解読に利用できる可能性があるからである。

「長阿含」写本を対象に精緻な研究をおこなったドイツのグドルン・メルツァーが特記しているのは、零細な写本断片を扱う場合、スキャン画像は写真よりもすぐれているということである。これは倍率の問題によるので、ばらばらの倍率で撮影された写真では、二つの断片を同じ写本と判定することさえ容易でない。また同一のフォリオに属する複数の断片の位置関係を再現するにも、倍率が一定である方がはるかに容易かつ正確に作業を進められる。

サンスクリット古文書学の専門家であるドイツのローレ・ザーンダーは、古文書学の基礎となる字母表の作成作業がコンピューターによってはるかに容易になったことに触れている。上述のメルツァーは書体の比較を通して「長阿含」写本の背後に複数の写字生の存在を推定し、さらに彼らの共同作業の実情の一端までも描き出しているが、こうした瞠目すべき成果もコンピューターによって支えられているといえよう。貴重な写本に直接触れることなく、したがって破損や摩耗のおそれもなく、現物を肉眼で見ても容易には得られない情報を引き出すということは、半世紀前には想像もされなかったことであるにちがいない。今後の技術の進歩によって、写本のあらたな読み取り方が生まれることも十分にありうると思われる。

2-2-2. 諸本の比較とデジタルテキスト資料の利用

画像データから読み取った「薬事」写本断片の文字情報をローマ字で書きお

こすとき、それを現存する「薬事」のテクストに比定する作業、つまりそれが「薬事」のどこに書かれている文字列であるのかをつきとめる作業も始まっている。筆者がこの写本の研究を始めた時点で、すでに大部分の断片はヴィレによって書きおこされ比定されていたが、それでも多くの零細な断片や、現存するギルギット写本に対応しない部分の断片が未比定のまま残されていた。

一行につき数文字分の幅しかないような小さな断片では、文字列を文章として読み取り、その意味をもとに比定することはほぼ不可能である。この場合、既存のテクストをデジタル化したデータの中で文字列を検索するという方法に頼ることになる。ギルギット写本「薬事」のテキストデータはヴィレによって入力されており、インド語古典文献のテキストデータベースである GRETIL（Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages: http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.htm）で公開されている。このデータはダットの刊本にもとづきつつ、ギルギット写本の葉番号や、ヴィレらによる部分的エディションのページ番号も記載した貴重このうえないもので、写本にもとづいてダットのテクストが直されている箇所もある。

しかしギルギット写本では「薬事」のほぼ半分が散逸しているから、上記の方法でテクストを比定することには限界があり、箇所によっては翻訳だけが頼りということも少なくない。極端な逐語訳で知られるチベット語訳はこの場合有用で、サンスクリット文にあらわれる単語は一つ一つ訳出されているし、サンスクリットの一行を訳すのに要するチベット語の文字数もおおまかには一定している。したがって、新出写本の零細な断片で一行に一単語程度しか得られなかったとしても、二行目、三行目と単語を拾ってゆき、それに対応するチベット語が訳文に一定の間隔であらわれれば、当該断片が「薬事」のその箇所にあたる可能性は高くなるわけである。根本有部律を含むチベット語訳大蔵経全体が ACIP（Asian Classics Input Project）によってテキストデータ化され公開されているので、これを利用した（https://www.asianclassics.org/）。

チベット語訳と比べれば、「薬事」の漢訳がサンスクリット写本断片の読解に直接役立つことは少ない。しかし後述するように漢訳も時として重要な情報を提供する。SAT（大正新脩大蔵経テキストデータベース http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php）のデータを利用した。

これらのテキストデータを利用して作業用に「薬事」の三言語対照テクストを作り、この中で単語やその一部を検索した。このほか根本有部律の「薬事」以外の章や近縁の文献にも、共通の言い回しなど「薬事」の解読に資するものがあるので、これらの資料のテキストデータをしばしば利用した。

2-3. 解読された写本断片からわかること

2-3-1. 写本構成上の特異性

新出写本の解読をとおして新しくわかったことに、写本全体の構成にかかわることと、文章内容にかかわることとがある。まず前者として、新出写本にはギルギット写本と比較した際に特筆すべき構成上の特徴がある。それはこの写本がそもそも何の写本であるのかという問題にかかわってくるものである。

ギルギット写本でもチベット語訳でも、「薬事」は 17 章からなる「律事」という文献の第 6 章である。ギルギット写本はこの「律事」全体の写本であり、全 523 葉のうち第 91 葉から第 293 葉が「薬事」にあたる。では新出写本はどうか。この写本の冒頭から 40 ～ 50 葉分は現存せず、そこに何が書かれていたかは知りえない。しかしこの葉数は、「律事」の第 1 章「出家事（しゅっけじ）」から第 6 章「薬事」のはじめの部分までをおさめるには少なすぎる。現存する断片とギルギット写本との比較によって新出写本一葉分のテクスト量を見積もり、現存する断片のうち葉番号が残っている最初のフォリオ（第 114 葉）までのテクスト量を計算したところ、失われた第 1 葉は「律事」の冒頭ではなく「薬事」の冒頭である可能性がきわめて高いことがわかった。この写本はギルギット写本のような「律事」の写本ではないのである。

ではこの写本は「薬事」単独の写本なのだろうか。今度の問題は、「薬事」として始まる（と思われる）この写本が「薬事」として終わるのかである。現存する断片の中には、「薬事」の末尾部分を含む複数のフォリオが貼りついて束になったものがある。表側からは第 201 ～ 204 葉の一部が見えており、その文面からすれば第 205 葉の裏面で「薬事」が終わるものと見こまれる。しかし束の裏側を見ると、第 205 葉の裏面は別の 1 葉の下からのぞいている。第 205 葉に続くこのフォリオはすでにクラークによって「ヴィニータカ」という文献に比定されていた。「ヴィニータカ」とは、根本有部律の「律事」とは別の部

分「ウッタラグランタ」の第2章である。この写本では「薬事」と「ヴィニータカ」のあいだで葉番号は途切れなく205から206へと続いているらしい。このことは同じ第206葉に属する別の断片と、それに続く「ヴィニータカ」の数枚の断片からわかる。

「律事」の第6章と「ウッタラグランタ」の第2章とは、根本有部律の中で遠くへだたった箇所にあるというだけでなく、たがいになんら内容上の関連をもたない。したがってこの二つのテクストが続けて書写されていることははなはだ奇妙であるのだが、その理由は現時点では不明とせざるをえない。「律事」の中で「薬事」だけが取り出されていることは、漢訳「薬事」の形態を想起させる。漢訳では個別の章をその下におさめる「律事」に相当する題名がなく、「薬事」などの章が単独の文献として訳出されているからである。そのような形式が漢訳者の判断で採用された可能性は考慮すべきだが、もしサンスクリット写本伝承でも各章が単独に書写されることがあったとすれば、漢訳は単にそれを反映したということになるだろう。いまのところこれ以上の手がかりはなく、両方の想定を残しておくのが穏当だと思われる。

「薬事」「ヴィニータカ」と続くこの写本が全体としてどのように終わるのかは、現時点ではあきらかでない。「ヴィニータカ」では終わらずにその先へ続いていた可能性は十分にある（「ウッタラグランタ」の別の章にあたる断片もこの写本群の中に発見されており、葉番号がうまく残っていれば、一続きの写本かどうか確かめることができる）。本稿では便宜的に「薬事」写本と称しているが、正確には「薬事・ウッタラグランタ」写本などと呼ぶべきものであろう。なお新出写本断片群のうちで「律事」の「薬事」以外の章に比定された断片は、現在までのところ皆無である。

2-3-2. 現存資料との比較

新出「薬事」写本（正確には「薬事・ウッタラグランタ」写本）は上にみたように構成の上でも興味深い特異性を示すが、この写本の蔵する最も重要な情報は無論そのテクストにある。まず、ギルギット写本「薬事」が全体の半分を失っている現在、新出写本はこの欠損を補う貴重なサンスクリット資料である。新出写本断片の中にはギルギット写本の現存する箇所と重なるものも、散逸した箇所にあたるものもある。各断片のもたらす文字列はしばしば一文をなすに

もほど遠いとはいえ、これまでチベット語訳と漢訳から推測するほかなかった多くの原語を含んでいる。

しかし新出写本のもつ資料的意義は単にギルギット写本の欠損を補うというにとどまらない。この写本とそれ以外の現存「薬事」諸本を比較することで、これらの資料の関係について貴重な情報を得られるのである。

「薬事」を含む「律事」現存諸本の異同については、これまでいろいろなことが言われてきた。1886年に説話集『ディヴヤ・アヴァダーナ』の校訂が出版されて以来、このサンスクリット資料と根本有部律の二つの翻訳のあいだに対応関係があることは学者に知られてきたが、1930年代にギルギット写本が発見され、続いてエディションが公刊されるに至って、根本有部律そのもののサンスクリット文と漢訳、チベット語訳、そして『ディヴヤ・アヴァダーナ』を比較することが可能になった。そして、これらの資料のあいだに数多くの相違があることがわかってきた。単語や文のレベルでの齟齬、さらにはある本の中で語られている説話が他の本にない（あるいは省略されている）といった構成上の不一致などである。こうした相違は、時として比較された複数の資料のうちのあるものが他のものより「正しい」、あるいは本来のものであるという想定のもとに語られた。その点で、ギルギット写本以外の三本はいずれもなんらかの形で毀誉褒貶をこうむっている。たとえばギルギット写本発見前、チベット語訳は誤りの多いものと見なされたことがあるが、それは『ディヴヤ・アヴァダーナ』と比較された結果であった。ギルギット写本が証言台に立つと形勢は逆転し、チベット語訳の「読み」は『ディヴヤ・アヴァダーナ』よりも正しいという評価を与えられた。ギルギット写本とチベット語訳が一致して『ディヴヤ・アヴァダーナ』と相違する例が数多くみられたからである。他方、漢訳についてはチベット語訳に比べ不完全で欠落だらけのもの、あるいは二流のものなどと酷評する向きもあったが、ギルギット写本と対照した結果かなり正確な訳だとする意見も出た。

資料同士のあいだに現にある相違が特定の資料の過失に帰せられたとき、そのもとにあったのはおそらく、文献本来の言語であるサンスクリットで書かれたものが「正しい」という前提、なおかつ現存諸本が単一のサンスクリット・テクストに由来するという前提であったと思われる。そうであったとすれば、

唯一のサンスクリット写本であるギルギット写本が判断の基準となったのは当然のなりゆきであったろう。また「正しさ」の評価という文脈以外に、現存資料間の相違のあるものが漢訳者やチベット語訳者による意図的なテクストの改変に帰せられることもあったが、これも単一のテクストからの変化という前提の上になりたつものであった。

しかし果たして本当にギルギット写本が本来のテクストで、翻訳や抄出が示すものはそこからの逸脱なのだろうか。それらは翻訳者や抄出者の過誤や作為の結果なのだろうか。ヤン・ウィレム・ドゥ＝ヨングとクラウス・フォーゲルはそれぞれ 1961 年と 1981 年に、異なる文脈で、諸本の相違が漢訳あるいはチベット語訳のもとづいた原典に由来する可能性を指摘した。言いかえればサンスクリットの伝承過程ですでに「律事」が多様化していた可能性である。この見地からはギルギット写本も当然、あくまで複数個存在したサンスクリット写本の一つとして相対化される。さらに近年クラークらによって、根本有部律の伝承には複数の系統が存在したという議論が説得力をもって展開されている。そのひとりイェンス・ボルグランはチベット語訳とギルギット写本の対応関係をめぐる諸学者の見解をたどり、単一の根本有部律という想定がギルギット写本の初期のエディションにおいてチベット語訳への過度の依存をひきおこしたこと、これへの批判を受けてその後の諸学者による部分的再訂はチベット語訳の偏重からはなれてきたことを指摘した。さらに、チベット語訳とギルギット写本の相違のあるものを後者の伝承上の問題に帰する見解にも触れ、やはり単一の根本有部律という想定を批判する立場から疑義を呈した。かくて根本有部律を扱う研究者のあいだでは、諸本の相互関係を云々するのにこれまでより一層細心な検討がともなわねばならないという認識が共有されつつある。

そして 20 世紀の末、第二のサンスクリット写本があらわれた。この新出「薬事」写本の重要性は言うを俟（ま）たないであろう。

» 説話単位での比較結果

すでに触れたように、諸本の異同は、単語や文から説話の構造にいたるまでの異なったレベルで起こっている。まず大きな説話レベルで比較すれば、目立つ相違は、ある物語が全文語られるか、明示的に省略されるか、あるいはまっ

たく言及もされないというものである。いったいに漢訳とギルギット写本はともに説話を省略する傾向が強く、チベット語訳は説話の全文を語ることが多い。しかしギルギット写本が漢訳と違ってチベット語訳と一致するといった例外はあり、またチベット語訳がつねに説話を省略しないわけでもない。つまり、これらのうちあるテクストが拡大成長あるいは縮小した結果、他のテクストになったというような単線的なシナリオは想定できないのである。

新出のサンスクリット写本はさらに多くの比較材料を提供する。新出写本でも上にみたのと同様の傾向がみられるが、まれな例として、チベット語訳にまったく言及されない説話が漢訳では明示的に省略される箇所があり、新出写本はここで漢訳に一致する。また、新出写本が漢訳・チベット語訳のいずれとも異なる例も見られる。これは特に注目すべき事例で、チベット語訳では連続する四つの説話が全文語られる一方、漢訳ではそれらの説話についてひとことの言及もない。そして新出写本では、各説話の見出し語だけがただ列挙されていたらしく、現存する断片に見出し語の一部がかろうじて読み取れる。

事例を集計した結果、おおまかな目安として、ギルギット写本も新出写本も説話が省略されるか不在である傾向においてはチベット語訳と漢訳の中間に位置し、比較的漢訳の方に近いということができる。なおこのレベルでは、ギルギット写本と新出写本の現存部分がうまく重ならないので、両者を比較することはできない。

» 語・句・文単位での比較結果

語や句や文を対象とする微細なレベルの比較では、翻訳資料は背景にしりぞき、おもにサンスクリット資料間の異同が問題となる。重要なのはギルギット写本が行や詩節の脱落といったやや大きな問題を抱える例で、新出写本の方が脱落のない、意味の通る文面を保存していることがある。そして二つのサンスクリット写本のあいだに相違がある場合、チベット語訳は往々にして新出写本に一致する傾向があり、比較が可能な事例に関しては漢訳もまたそうである(ただし例外もある)。

『ディヴヤ・アヴァダーナ』は、例外を含みつつもギルギット写本よりは新出写本に一致する傾向が強い。現行の『ディヴヤ・アヴァダーナ』校訂本がも

とづいた写本はすべてギルギット写本「律事」や新出「薬事」写本よりはるかに新しく、ギルギット写本と異なる「読み」を無数にもっている。それらの「読み」のあるものは律からの抄出後、説話集としての伝承の中で生じたものであるかもしれないが、しかし新出写本との比較によって、あるものはかなり古い、しかも（説話集ではなく）律そのものの文面に通じることがあきらかになったといえる。

また言語上の特徴として、ギルギット写本と新出写本の相違に、サンスクリット語としての標準化の痕跡をいくらかみることができる。「律事」は中期インド語の一種である仏教混淆梵語（ぶっきょうこんこうぼんご）の要素を残すサンスクリットで書かれているが、新出写本が中期インド語的な語形を示す箇所で、ギルギット写本は標準的サンスクリットの形を見せている。この場合後者から前者へという変化は考えにくく、前者から後者へ、つまり標準的でない語形から標準的な語形へという変化が起こったものと推測される。

総じて、このレベルの比較においては、新出写本の方が全体としてテクスト伝承の早い段階を示しているということができる。

2-3-3. 失われた無数の根本説一切有部律写本について

新出写本の現在利用可能な文字の量がごく限られているという事実には注意しなければならないが、この写本からは現存諸本のあいだにある相違の多くがすでにサンスクリットの、そして律の写本伝承の段階で起こっていたことが確かめられる。これは根本有部律のサンスクリット伝承を知ろうとする場合に、現存諸本の資料的価値をおしなべて高く再評価しうることを意味する。説話構造レベルの比較からは、漢訳がかつて考えられたよりも原典に忠実であったことがわかり、語のレベルの比較からは、チベット語訳がたとえギルギット写本と違っていてもそれ自体正確な翻訳でありうることが知られる。そして『ディヴヤ・アヴァダーナ』も、たとえギルギット写本と違っていても、それが説話を借用したところの律の文面を正確に保存している可能性がある。もちろんこれらの資料自身における誤訳や誤写や再編集の可能性を否定しさることはできないが、その判断には大いに慎重であるべきだろう。

根本有部律を漢訳した義浄（ぎじょう）の証言するところでは、この律を伝承していた根本説一切有部の勢力はインドの北方から東南アジア一円に及んだという。その

広大な地域のそこここで「薬事」というテクストが読まれ書き写されていたとしても、いまのわたしたちのもとにはたった二つの写本しか残されていない。新出「薬事」写本の資料的意義は、かつて流通し、消滅した数多くの根本有部律サンスクリット写本の存在を指し示すところにあるといえる。

3. おわりに

薬事・ウッタラグランタ写本の研究成果はインターネット上で出版される予定である。これは写本の内容や関連資料に関する議論、研究の経緯などをまとめた序章と、ローマ字で書きおこした写本のテクストとを中心とし、写本断片の画像も含めたPDFファイルの形になる（オンデマンドでの紙媒体の発行も予定している）。写本のテクストが今後根本有部律や他の文献の研究に十分に利用されるためには、検索用に編集し直した簡略なテキストデータも別途提供する必要があるだろう。その場合、ダットによるギルギット写本のエディションとのあいだに、ページ番号の参照などでなんらかのつながりがあることがのぞましい。問題が多いとはいえ、ダットのエディションは多くの場合に研究者によってまず参照される資料だからである。理想的には、ダット本のテクストと新出写本のそれとの両方をおさめ、文章の欠けた箇所なども可能なかぎり補ったテクストファイルが作れればよいと思う。これは出版されるエディションとは次元の異なる作業用のファイルにすぎないが、研究者がそれを手がかりに写本の詳細へと速やかに進むことができれば、有益であることはまちがいない。

本研究で読まれた文字が共有の道具となって、別の文字が読まれるときの助けとなることを願っている。

参考文献

- 根本有部律ギルギット写本のエディションと新しい写真版、同写本「律事」の研究

Nalinaksha Dutt. *Gilgit Manuscripts*, vol. 3. 4 parts. Srinagar: Research Department. 1942–50. Reprint, Delhi: Sri Satguru Publications, 1984.

Klaus Wille. *Die handschriftliche Überlieferung des Vinayavastu der Mūlasarvāstivādin.* Stuttgart: Franz Steiner Verlag. 1990.

Shayne Clarke. *Vinaya Texts.* Gilgit Manuscripts in the National Archives of India: Facsimile Edition, vol. 1. New Delhi: National Archives of India; Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University. 2014.

- 新出の「長阿含」および根本有部律の写本についての概観

Jens-Uwe Hartmann and Klaus Wille. "The Manuscript of the *Dīrghāgama* and the Private Collection in Virginia," in Paul Harrison and Jens-Uwe Hartmann, *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research. Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15–19 2009*, Vienna: Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2014, 137–155.

- インド仏教写本の古文書学における近年の論考のうち、本稿で参照したもの

Lore Sander. "Dating and Localizing Updating Manuscripts," in Paul Harrison and Jens-Uwe Hartmann, ibid., 171–186.

Gudrun Melzer. "A Palaeographic Study of a Buddhist Manuscript from the Gilgit Region: A Glimpse into a Scribes' Workshop," in Jörg B. Quenzer, Dmitry Bondarev, and Jan-Ulrich Sobisch, *Manuscript Cultures: Mapping the Field*, Studies in Manuscript Cultures vol. 1, Berlin/Munich/Boston: Walter de Gruyter GmbH, 2014, 227–272.

- 「薬事」の内容と新出「薬事」写本

八尾史 .『根本説一切有部律薬事』. 東京 : 連合出版 . 2013.

———. "Two Sanskrit Manuscripts of the Mūlasarvāstivādin *Bhaiṣajyavastu* from Gilgit," *WIAS Research Bulletin* 10:91–102. 2018.

———.「根本説一切有部律薬事の新出写本——現存状況、構成の問題、ギルギット写本との関係」『佛教學』60:1–19. 2019.

- 「ヴィニータカ」と新出写本

Shayne Clarke. "The *'Dul bar byed pa (Vinītaka)* Case-Law Section of the Mūlasarvāstivādin *Uttaragrantha*: Sources of Guṇaprabha's *Vinayasūtra* and Indian Buddhist Attitudes towards Sex and Sexuality," *Journal of the International College for Postgraduate Buddhist Studies* 20:49–196. 2016.

- 『ディヴヤ・アヴァダーナ』の訳註研究

平岡聡 .『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』. 東京 : 大蔵出版 . 2007.

- 根本有部律の現存資料および『ディヴヤ・アヴァダーナ』の異同、翻訳の正確さなどに関して

Edward Byles Cowell and Robert Alexander Neil. *The Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends* (esp. p. x). Cambridge: University Press. 1886. Reprint, Delhi: Indological Book House, 1987.

David Roy Shackleton Bailey. "Notes on the Divyāvadāna Part 1," *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 1950:166–184. 1950.

季羨林 .「記根本説一切有部律梵文原本的發現」.『周叔弢先生六十生日記念論文集』, 香港 : 龍門書店 , 1951, 176–181, Reprint, 1967.

Kenneth Ch'en. "Apropos the Meṇḍhaka Story," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 16:374–403. 1953.

Jan Willem de Jong. "Les *Sūtrapiṭaka* des Sarvāstivādin et des Mūlasarvāstivādin," in *Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou*, Paris: Éditions E. de Boccard, 1968, 395–402 (esp. 401).

Claus Vogel. "On Editing Indian Codices Unici (with Special Reference to the Gilgit Manuscripts)," in H. von Stietencron, *Indology in India and Germany: Problems of Information, Coordination and Cooperation*, Tübingen: Seminar für Indologie und Vergleichende Religionswissenschaft, 1981, 59–69 (esp. 62).

松村恒 .「西蔵語訳律蔵における水平化の問題」.『日本西蔵学会々報』, 40:11–17. 1994.

Fumi Yao. "A Brief Note on the Newly Found Sanskrit Fragments of the *Bhaiṣajyavastu of the Mūlasarvāstivāda-vinaya,*" *Journal of Indian and Buddhist Studies* 61(3): 72–77. 2013.

Jens Wilhelm Borgland. *A Study of the Adhikaraṇavastu: Legal Settlement Procedures of the Mūlasarvāstivāda Vinaya* (esp. pp. 17–18). PhD diss., University of Oslo. 2014.

Bhikkhu Anālayo. *Vinaya Studies* (esp. p. 67 note 57). Taipei: Dharma Drum Pub-lishing Corporation. 2017.

- 根本有部律の伝承の複数性について

Christopher D. Emms. *Evidence for Two Mūlasarvāstivādin Vinaya Traditions in the Gilgit Prātimokṣa-sūtras*. MA diss., McMaster University. 2012.

Shayne Clarke. "Vinayas," in *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, vol. 1, Leiden and Boston: Brill, 2015, 60–87 (esp. 73–74).

Jens Wilhelm Borgland, ibid., 18–19.

Bhikkhunī Dhammadinnā. "Women's Aspirations and Soteriological Agency in Sarvāstivāda and Mūlasarvāstivāda Vinaya Narratives," *Buddhism, Law & Society* 1:33–67. 2015–2016.